

ソシアのプチレンコン大統領はウクライナ共和国を支配下に置くには一週間もかからないと高をくくっていたが、すでに半年が経過した。意外にも西側諸国の武器供与によるウクライナ軍の抵抗が強力なこともあるが、それ以上に得体の知れない戦車の攻撃にソシア陸軍は後退を余儀なくされた。それどころが投入した戦車などほとんどが破壊されてしまった。

一方、中華民国の新疆ウイルス族自治領ではウイルス族の人権を巡って西側諸国からクレームが上がっていた。中華民国政府は西側の視察を交わすために懐柔政策をとるがウイルス族のなかで科学的素養の高い集団が目立たないように生活していることに気付いた。そう、あのグレーデッドの残党だ。彼らの地下工場には近未来的な製造装置があった。しかし、人民解放軍が全容を確認する前に忽然と姿を消した。

ソシアと中華民国は決して仲がいいわけではないが、力尽くで物事を進めるやり方は似通っている。だから従わざるを得ない国々は表だって非難しないが、それ以外の国々からは煙たい存在だった。だから両国は何かにつけてかばい合った。

さすがにこの大国二国が意思疎通を緊密にとればかなりの情報を集めることができる。その結果浮かび上がったのがウイルス族の一部の科学者たちだった。ウイルス族はイスラム系で石油産油国を除いて以前ほどの勢力を持たない。だから旧ソシア連邦や中華民国は属国圧化した

り自治領として管理した。

ウイルス族自体もそうだったが、グレーデッドの残党からすれば潜りやすい民族だった。それはウイルス族が混血集団だったからだ。顔体型が様々なのだ。彫りの深い顔、のっぺりとした顔。足の長い者、短足な者、瞳の黒い者、青い者、茶色の者、灰色の者。蒙古斑のある者、ない者。信仰する宗教も様々。言語も様々。これほど違っている割には仲が良かった。いや違っているから喧嘩せずに仲良くなった。だからグレーデッドの残党は潜りやすかったし、驚くべき兵器を製造しやすかった。

しかし、ソシアからの要望で中華民国はそれまで以上に新疆ウイルス自治領をこれまで以上に厳しく監視した。絶対に認めないが新疆ウイルス自治領から新型コロナウイルスが広がったから元々厳しく管理されていたが。

しかし、あのような戦車を作る工場どこか設備を確認できなかった。繰り返しなるがウクベスタン人、イリ族、ルールマニア人、スエーデン人と人種が複雑で混血も多い。宗教もイスラム教、キリスト教、そして一部仏教を信仰する者もいる。そのような中でどのようにして卓越した能力を持つ人間、つまりグレーデッドの残党を探すのは困難を極める。

元々グレーデッドはほくろのような島、鯛湾の対岸付近の中国大陸に本拠地を構えていた。もちろん誰にも気付かれない秘密基地だった。グレーデッド総統がノロに敗れるとイリが総統に就任したが、様々な経緯があつてこの秘密基地は解体された。この経緯については「トリプ

ル・テン第 *** を参照。

残党の過半はノロと行動を共にしてノロの惑星に移動した。残りは故郷に帰ったりもしたが新疆ウイルス自治領や沖に浮かぶ島「鯛湾」に移動した。鯛湾国民は勤勉で真面目だ。そこに溶け込むように高度な製造技術を伝授すれば先進国並みのテクノロジ―が発展し思わぬ機械や装置を製造できることになる。

それに中華民国が気付かないはずはない。しかし、鯛湾は中華民国に呑み込まれないように必死になって抵抗する。その抵抗の源となる防衛システムは大国中華民国の軍事力を持ってしてもぐらつくことはない。祖国を守ると言うことにかけてはウクライナ共和国以上に熱い。

新疆ウイルス自治領からの設計図を元に鯛湾で驚くべき戦車が製造された。それがレッド・エレファント、コバルト・カウ、イエロー・タイガー、そしてハリー・マウスだった。小国だが半導体製造大国の鯛湾でも簡単に製作できなかった。何とか一両ずつ完成させると秘密裏にウクライナ共和国に輸送した。リモートするのはグレーデッドの残党だが所在場所は不明だ。鯛湾はこれらの戦車の実践データを受け取ることによってウクライナ共和国を側面から支えることになった。もちろんソシアのウクライナ共和国侵略と同じことを中華民国が鯛湾にする可能性が否定できないからだ。

さらに追加の設計図があった。それがシャチに似せた海獣バンドという海中戦闘艦だった。潜水艦ではない。魚雷はおろかミサイルも大砲も持たない戦闘艦、言い換えれば格闘艦だ。武

器は一つだけ。ダイヤモンドより硬い大きな背びれ。そして武器ではないが深海探索機より深く潜れるし数百ノットのスピードを出すことができる。ソシアが誇るブラックシー艦隊などではなかった。

鯛湾は決して国内外にそれらの情報を流すことはなかった。何も知らない中華明国の最高責任者は鯛湾周辺で威嚇訓練を行っている。その模様を静かに眺める鯛湾防衛軍は完璧なまでの防衛策を手に入れる。もはや中華明国、恐れるに足らずとなった。